

第4章

食育活動による効果測定 - アンケート集計結果に基づく -

1. 世代別課題把握のためのプロジェクト構造

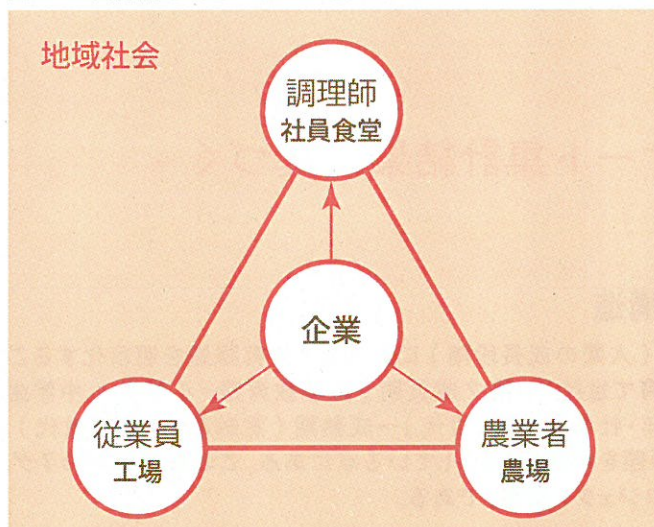
本プロジェクト構造の特徴は、既述の通り、世代の流れ（人間の成長段階）に対応して食育課題を明示化することを意図している点にある。つまり、第1成長期（幼児期＝子育て世代）→第2成長期（義務教育期＝小学生＋中学生）→第3成長期（自立化期＝高校生＋大学生）→成人期（青年・壮年期＝働く世代）→成熟期（高齢期＝シニア世代）のライフサイクルに合わせて食育プログラムを実施し、世代別課題を把握しようとしている点にある。これを世代別の7グループとして纏めたのが、表4-1「世代別課題把握のためのプロジェクト構造」である。

表4-1：世代別課題把握のためのプロジェクト構造

対象	地域	目的	アンケート				
			種類	内容	対象者	回数	時期
親子・子育て	舞鶴	日本型食生活の認知度と実践者の増加、 農林水産業への理解を深める	アンケート レーザーチャート	同グループ内 における時系 列比較	保護者(子供)	2	開始、終了時
	福知山						
	綾部						
小学校	福知山	センター式給食(福知山)と自校式給食(綾部)における、2種の給食方式が児童、保護者の食育に与える影響	アンケート	対象2市におけるグループ比較	生徒 PTA	1	終了時
	綾部						
中学校	福知山	講座後の主観的変化を検証	アンケート	意識変容の確認	生徒 PTA	1	終了時
	舞鶴						
高校	福知山	講座後の主観的変化を検証	アンケート	意識変容の確認	生徒	1	終了時
	綾部						
大学		プログラム後の主観的変化を検証	アンケート	意識変容の確認	生徒	1	終了時
青年・壮年	福知山	プログラムを始め、サラダバーなどの介入をし、生化学データとアンケートにて新たな食と農のシステム構築の検討	アンケート レーザーチャート	同グループ内における時系列比較	従業員	2	開始、終了時 レーザーは3回実施
シニア		プログラム後の主観的変化を検証	アンケート	意識変容の確認	シニア	1	終了時

子育て世代（幼児期）と働く世代（青年・壮年期）以外の5グループに関しては、主な食育活動として最も一般的な講座を実施し、その直後のアンケート調査によって世代別課題を把握する調査方法を取っている。ところが、子育て世代と働く世代に対しては、比較的長期（約2か月間）の食育活動を実施し、その活動前後の変化を把握できるような調査方法が取られている。この間に実施された食育活動は、講座以外に体験が主な活動となっている。また、働く世代に対しては、食育活動として、食育の講座・ワークショップとともに、企業の社員食堂での昼食内容の変化（野菜の摂取増加）を軸として位置づけた。

図 4-1：食育活動を通しての地域社会における企業の役割



野菜を軸とする社員食堂の昼食改善を地元農家の野菜生産と結びつけることによって、つまり、食堂のケータリング会社と地元農家との結合による地産地消のリンケージが可能となった。このことは、図 4-1「食育活動を通しての地域社会における企業の役割」に明示されるように、企業が食堂のあり方を変えることによって、従業員の健康改善のみならず地域社会の発展に貢献する構造を作り上げていることを意味している。従って、本プロジェクトでは、この働く世代に焦点を当てた食育活動が最も重要なものとなった。

2. 一般アンケート票・レザーチート図の質問構造

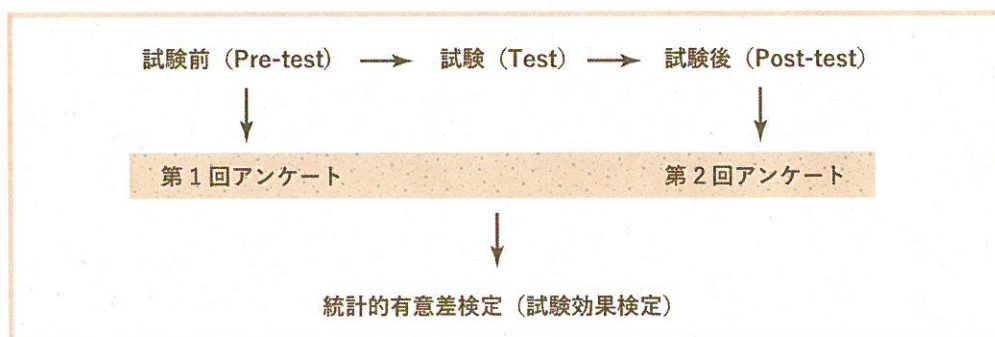
一般のアンケート票は、全部で 63 項目の質問から成り立っている原案を基軸に、異なる対象者層によって質問項目を絞る形で調整した。アンケート票の質問構造は、以下の通り、5 部門から成り立つ。

一般アンケート質問構造

① 属性	
② あなたの食に対する考えについてお尋ねします	→ 食についての考え
③ あなたの食事についてお尋ねします	→ 食事のあり方
④ あなたの食材の購入についてお尋ねします	→ 食材の購入
⑤ あなたの農林水産業に対する関心についてお尋ねします	→ 農林水産業への関心

このアンケート票とは別に、比較的長期（約 2 か月間）の食育活動を実施し、その活動前後の変化を把握できるような調査方法を導入した子育て世代と働く世代に対しては、以下の質問項目を網羅したアンケートを食育活動実施の前後に実施し、レザーチート図を描くことによって変化の計測を可能とした。

図 4-2：レザーチート調査の構造



レザチャート調査の質問構造は、以下の通り、食生活、ストレス、コミュニケーションの3部門から成る。

レザチャート調査用アンケート質問構造

1. 食生活 → 27 問

① 健康（食）についての考え

② 食習慣

③ 食事の摂り方

④ 食事の満足度

設問様式 ex) 食事は楽しい雰囲気食べるのがいいと思う

1. 非常に 2. かなり 3. 多少 4. 全くない。

2. ストレス → 29 問

① 肯定的気持ち

② 精神的ストレス症状

③ 肉体的ストレス症状

設問様式 ex) 活気がわいている

1. ほとんどなかった 2. ときどきあった

3. しばしばあった 4. ほとんどいつもあった。

3. コミュニケーション → 9 問

① 上司との関係性

② 同僚との関係性

③ 家族との関係性

設問様式 ex) 上司とはどのくらい気軽に話ができますか？

1. 非常に 2. かなり 3. 多少 4. 全くない。

3. アンケート回収結果

本プロジェクトは、世代の流れ（人間の成長段階）に対応して食育課題を明示化することを意図しているため、世代別7グループが活動対象となっている。つまり、第1成長期（幼児期）の子育て世代、第2成長期（義務教育期）の小学生世代と中学生世代、第3成長期（自立化期）の高校生世代と大学生世代、成人期（青年・壮年期）の働く世代、そして成熟期（高齢期）のシニア世代である。この世代別7グループのアンケート回収状況を纏めたのが、表4-2である。子育て世代（幼児期）と働く世代（青年・壮年期）以外の5グループに関しては、回収したアンケートは、主な食育活動として最も一般的な講座・体験を実施した後の1回のアンケート調査にのみものであるが、子育て世代と働く世代に対しては、比較的長期の食育活動の実施によって、その活動前後の変化を把握するために活動前後の2回のアンケート調査方法が取られている。この場合、回収数は延べになるため、実際の回答者数の2倍の回収数となる。

表4-2：アンケート実施状況

		回収数	記述分析	t検定	
				性別	活動有無
親子・子育て	全般(原案)	65	●		
	レーダー	120			
小学校	生徒	131	●	●	
	保護者	96	●	●	
中学校	生徒	202	●	●	
	保護者	96	●	●	
高校		131	●	●	
大学		191	●	●	●
青年・壮年	全般	242	●	●	●
	レーダー	424	●	●	
シニア(原案)		94	●		
合計		1792			

表4-2では、アンケート回収状況以外に、アンケート回収の結果収集されたデータの統計分析を纏めている。子育て世代とシニア世代は、女性比率が其々100%、99%であったために性別間の差異検定(t検定)は適用していないが、他のグループは性別間の差異検定を行っている。また、大学生世代と働く世代に関しては、食育活動を実施する対象グループと何ら食育活動を実施しない制御グループとに分け、両者間の差異検定を行うことによって食育活動の影響測定ができる企画となっている。

表 4-3：企業食育活動における対象グループと制御グループ

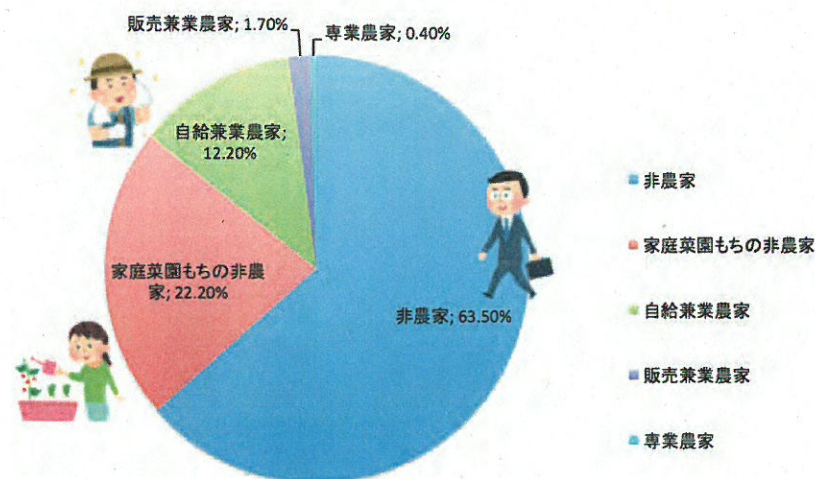
	対象グループ (指導群)	制御グループ (対照群)	計
男子	106	51	157
女子	50	28	78
計	156	79	235

本プロジェクトでは、食育の講座・ワークショップとともに、企業の社員食堂での昼食内容の変化を軸として位置づけた働く世代に対する食育活動が最も重要なプロジェクト要素であるが、それには、既に述べられている通り、天藤製薬、関西金属、堀場ST、タツタ電線、日本血液製剤の5社が参加し、その結果、表 4-3 に見られるとおり、食育活動対象グループとして156人、制御グループとして79人、合計235人のアンケート回答者を得ることができた。

4. アンケート集計結果から見える働く世代の食の課題

●働く世代に対する食育アンケートの対象グループの属性は、福知山地域の企業に勤める世帯の一般的特徴を持つ

図 4-3：働く世代に対する食育アンケートの対象グループの属性



① 家族員数 1 人 (12.1%)、2 人 (19.6%)、3 人 (23.8%)、4 人 (27.1%)、5 人 (10.0%)、6 人以上 (7.5%)。

② 非農家 (63.5%)、家庭菜園もちの非農家 (22.2%)、自給兼業農家 (12.2%)、販売兼業農家 (1.7%)、専業農家 (0.4%)。

4.1 働く世代の食の一般的課題

図 4-4：食に関する知識の偏り



●食に関する知識の偏りは激しい

① 主菜・副菜・欠食・偏食・脂肪・タンパク質・無機質・ビタミン・旬・食文化・生活習慣病などは約 80% 以上が知識として認知している。

② 個食・濃食・六基礎食品・SV 基準・有機 JAS 食事バランスガイドなどの知識としての普及率は約 10% 以下の水準となっている。